

PR

PR 鼻グズさん悩める人必見！今話題の酢酸菌配... 株式会社トウ・キューピー

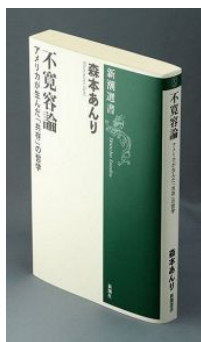
文化・芸能

読書ナビ

シェア ツイート

<書評> 不寛容論

03/14 05:00



森本あんり著

共存の思想の源流 清教徒に

評 島園進 (東京大学名誉教授)

「政教分離」はどのようにして生まれ、広がったのか。自らが信ずるものに従わない人々と共存する考え方の基盤は何か。本書は、植民地時代の米国ピューリタンの中に信仰に基づく共存の哲学の源流を探る。

近代以前、人々は特定の宗教的世界観による秩序に従うことを求められた。世界観を共有しない構成員は周辺に居ることを許されるか、さもなければ追い出された。まだキリスト教に接していない異教徒は前者、すでに触れた上で否定した後者は異端として排除された。この「許容すること」が西洋の「寛容」の哲学の原型で、トマス・アクィナスら中世の神学者が定式化している。

16世紀の宗教改革以後、西方キリスト教世界が分裂し、旧教と新教、さらに複数の教派が並び立つ世界となった。国教による統一が維持され国ごとの棲(す)み分けが続くが、18世紀末のアメリカ独立革命とフランス革命によって立憲体制が創造され、信教の自由と個人の人権の理念を掲げる立憲民主制国家が成立する。政治的に自由な個人が結び社会契約が、多様な信仰を許容する新たな「寛容」の基盤となったことになる。

従来、受け入れられてきたこの捉え方では、「寛容」は神から人への秩序原理の移行に沿って、宗教の外の世俗領域で発明された理念ということになる。しかし、北米では自由を求めて新大陸に渡ったピューリタンの中から、宗教的社会統合よりも良心の自由を尊ぶリーダーが登場する。それが本書の主人公、ロジャー・ウィリアムズだ。

聖者が構成する植民地からはみ出す、多様な信仰集団や個人を受け入れ、ロードアイランド植民地を建設したウィリアムズに近代的な寛容と共存の思想のもう一つの源流がある。キリスト者でありアメリカ思想史の専門家である著者は、広い視野からそのことを解き明かしていく。

宗教外の世俗領域に自由の原理があり、諸信仰を許容するというのではない。良心を支える固有の信念は譲らない。それ故にこそ、異なる他の生き方を許容する自由だ。現代社会で目立つ新たな不寛容に対峙(たいじ)する、信仰に基づく寛容思想の提示でもある。(新潮選書 1760円)

<略歴>

もりもと・あんり 1956年生まれ。国際基督教大教授。専攻は神学・宗教学

主要ニュース

一覧へ

NTT社長、業務依頼を否定 接待問題で陳謝 参院予算委



コロナ下の巣立ち 道内公立中で卒業式



チカホ開通10年、バリアフリーは大丈夫？



ミャンマーの犠牲者120人超一部に戒厳令



違反歴ある75歳以上は運転技能検査へ



12歳の仲邑菫初段、史上最年少で二段昇段



道警人事 電子版に一覧を掲載

PR

おすすめ

一覧へ

あえぐライブハウス 道内半数、売上高8割減 公演激減... (03/14 01:13 更新)

